

室生犀星 六つの〈自叙伝〉

二 瓶 浩 明

1

大正八年(一九一九)、小説家への転身を企てた『愛の詩集』(大7・1)『抒情小曲集』(大7・9、ともに感情詩社刊)の詩人・室生犀星は、同年中に以下のように自身の経歴・人生に題材を求めた(『自叙伝』)をたてつづけに執筆・発表した。

- 1 抒情詩時代(『文章世界』大8・5)
- 2 ある山の話(『短歌雑誌』大8・8)
- 3 幼年時代(『中央公論』大8・8)
- 4 一冊のバイブル(『文章世界』大8・9)
- 5 性に眼覚める頃(『中央公論』大8・10)
- 6 或る少女の死まで(『中央公論』大8・11)

このうち、世に犀星ありと喧伝せしめ、小説家としてのデビューをはなやかに飾った作品が『幼年時代』であり、不退転の決意でもって執筆されたことはよく知られていることだ。この『幼年時代』にはじまって『性に眼覚める頃』『或る少女の死まで』とつづく、当時の一流雑誌『中央公論』に発表された三連作は「——時代」「——頃」「——まで」と表題に述べるように、あえて時期的な区分を明らかにすることにより、一つの時代を語ろうとする意志的な姿勢を見せていたのである。このことはこれらの作品がある連絡、統一的な視点によって、長編的な構想のもとに書かれていたことをうかがわせる。

これに対して、『抒情詩時代』『ある山の話』『一冊のバイブル』は、それらを束ね、貫くべき視点を持つてはいず、これまでに作者が経験した出来事を、題材的な興味のままに小説化しただけといった印象を与え、相互に脈絡を失って、一時代の挿話たるにとどまっていた。主人公・「私」の成長、発展という主題を、十分に描き得ていないのである。

とはいえ、これら二つの作品群、六つの(『自叙伝』)は、描くべき素材、時期がそれぞれに重ならないように配慮されており、『ある山の話』にはその末尾、「(『自叙伝の一章』)」と記されていることから、犀星が当初からこれら(『自叙伝』)の執筆について、ある種の見通し、長期的な計画を持っていたことは確かなことであった。どうやらそれは数作をもって、一つの長編的な(『自叙伝』)を構想する目論見だ、と考えられるのであるが、しかしながら、『幼年時代』にはじまる三連作によって、それは修正・再編を余儀なくされ、これら二つの作品群、大正八年前期と後期とに言い換えても良いが、室生犀星の(『自叙伝』)についての考え方は大きく変化し、それら作品のありようも、まるで異なったものになっていたのであった。

このことについて、六つの(『自叙伝』)、その扱われた時期を考察することにより、究明していこうとするのが小論の目的である。

『抒情詩時代』は、「私は十五ぐらゐの時代から俳句を作つてゐた」という一文からはじまっている。「初めは旧派の宗匠にならつてゐたが、後には紫影先生に見てもらつてゐた」と続くこの作品は、以後、「そのころ少年世界が私のふところに入つてゐた」「私が芝居を見はじめたのも、そのころからであつた」等、「そのころ」を何回となく述べるに對して、年齢を述べるのは冒頭の一文のみ、それに準ずるものとして「私」が中学の一年生であつたことを記しているが、とすればこの作品は、ある年、「十五ぐらゐ」の早春から晩春にかけてのこととして、時期的な設定がなされていたと解すべきだろう。

もつとも、「十五ぐらゐの時代」とあれば、あえて年齢を限定する必要はなく、十四でも十六歳でも構わないのだが、これを前後を含めた二・三年間のこととしてはならず、ある一年の春、三、四か月間のこととして理解せねばならぬことは、作品自体が語っていることだ。何かしらうごめくような少年の内部における眼覚めとむず痒さは、早春から晩春まで、季節の推移、美しい自然の営みのなかで、物憂くも哀しくも描かれていた。

犀星は後年『魚眼洞発句集』(昭4・4武蔵野書院刊)「序」において、十五歳の時に芭蕉庵に発句の添削してもらつたと述べているが、これは年代も、また旧派宗匠に学んだことも信じ

難いとされて^(注)いるが、ここの叙述には符合している。それはともあれ、彼が四高教授藤井紫影に、北声会において俳句の評点を受けはじめたのは、明治三十八年(一九〇五)十七歳の時(満年齢十六歳。以下とくにことわらない限り、数え年を採用する)からであり、作中、東京の少年雑誌に文章を投書して「銀のハアト形のメダル」を賞牌として得た「行く春」という文章は、同年七月、博文館発行の『少年世界』に掲載されたものであれば、ここの「十五ぐらゐの時代」は、十七歳のこととしても良いかもしれない。しかしその外に述べられていること、例えば新聞や雑誌の口絵を美濃判紙で写し取ることを秘かな快樂としていたこと、酒井某という女形にいれあげて金を騙し取られたこと(これは養母の体験をもとにして書かれたものであろうが)、ひさという少女(村田艶のことだと思われる)との交情のことなど、これらを十七歳のこととして特定することはできないのである。あるいは仲間たちと煙草をくゆらしていたことは、むしろ犀星が高等小学校在学中、明治三十三年、四年、十二、三歳のこともかもしれず、だからこそおぼめかした言い方「十五ぐらゐの時代」と書かれていたと推測されるのである。

犀星は大人に伸び上ろうとして、なお幼なさを残す未成熟なこの時期を描くに際し、自らを「中学の一年生」であつたと経歴を詐称している。高等小学校を三年次に退学、そのまま金沢区裁判所に雇として就職、以降、正規の学歴を持たなかつた彼

は、なかなか学歴劣等感から抜けられなかった。それはそうした感情から発した作為ではあつただろうが、貧寒な給仕生活を写さずに、内面の疼きのみを描こうとすることは、詩人の虚栄であつたと同時に、作品の方法・要請でもあつたと思われ、その意味で決して要らざる作為であつた訳ではなかつた。しかしながら少年にとつての生活の半分、学校生活を描けなかつたことは、いかにもこの作品を薄手なものにさせ、そのためにかえつて雑駁とも言ふべきさまざまな出来事を取り入れなければならなかつたことも事実である。

十七歳のことを基本にして、多少関連的なことを取りまとめ、それを「十五ぐらゐの時代」の出来事として描いていたのが、この『抒情詩時代』という〈自叙伝〉であるが、そこには年齢を偽造するという、悪辣かつ意図的な方法はなかつたとすべきであろう。第一にそこに述べられていることは、随分と事実な正直であり、中学校の生徒であつたとする作為も、むしろ可愛気のあるものだ。そして「そのころ」を連発すること自体、事実を素材として未整理なままに取り入れようとする姿勢を示すものであり、もしも事実を二年早めるという意図が作者にあつたとしても、そうした未熟な並列的な方法にあらわれるような作為など、論ずるに足りないものであるからだ。

少年が俳句を愛し、詩や文章を書きはじめたこの時期を、作者は「抒情詩時代」と名付けているが、これは必ずしも素直に

受け入れられる言葉ではなかつた。作者が抒情詩なるものを書きはじめた時代なのか、抒情詩的だと思われる時代なのか、まるで不明ではあるが、いずれにしてもそれ自体が空廻りをしてるのである。

ところがこうした命名は、次の引用を見れば違つた形でよみがえつて来るはずだ。『抒情小曲集』「自序」に記した言葉。

私は本集に輯めた詩を自分ながら初初しい作品であること、少年の日の交り気ないあどけない真心をもつて書かれたことを合せて、いくたびか感心をして朗読したりした。ほんとに此詩集にある小品な詩は、恰も『小学読本』を朗読するやうに、素直な心で読み味つてもらへれば、たいへん心うれしく感じる。このやうな幼ない「抒情詩時代」が再び私にやつて来るものでもなく、また、それを再び求めることも出来ないことを知つてゐる。人間にはきつと此「美しい抒情詩」を愛する時代があるやうに、だれしも通る道であるやうに、ほんとにこれらの詩をあつめて置きたいと思つたのも、みなここにあるのだ。

同じ序文に「愛の詩集」まで歩んだ自分を知るにはどうしても此の「抒情詩時代」の自分をも知つてほしくおもふ。自分にもなほ美しい恋を恋したり、甘美な女性的なリズムを愛したりした時代のあつたことを物語りたいのである」と犀星は述べているが、「自序」を読む限りでは「悩ましい人懐こい苛苛し

い情念や、美しい希望や、つまなき悪事や、限らない嘆賞や哀憐やの諸語」をもった「少年時代」こそが「抒情詩時代」であり、この詩集に収められた詩篇の数々は、その時代に制作し、その時期の感情・思いを対象としてうたいあげたものだと、理解されるのである。しかしながら、詩集の中におさめられたものは、『抒情小曲集』覚書〔「感情」大7・9〕に従えば、「二十歳（私注、明治四十一年）ころより二十四歳（私注、大正二年）位までの作」であり、実際は大正元年（二十四歳）から同五年（二十八歳）までにおそらくは制作、そして発表されたものであった。ここに言うところと実際の制作、発表時期とのズレについては、記憶違い、あるいは少しでもそれを早めたいとする虚栄による作為だと理解されるにしても、「自序」に言う少年時代、その感情と、創作された時期、思いとのズレは、さどう理解すべきであろうか。

『抒情小曲集』にうたわれた感傷、思いは、少年時代のそれにも、多少とも通じないものもない訳ではないが、矢張り青年期のそれによって彩られているものだ。そのことについての研究成果は、既に確かな形で入手している。「自序」に言う少年期の感情を、今なおそれを失わないでいる青年がうたいあげたとする解釈は、とても成立し得ないのである。しかも先に述べたように、制作年代も青年期であったとすれば、『抒情小曲集』「自序」に述べる言葉は、詩人の意図的な扮飾、あるいはそう

読んで欲しいという希望を述べたものと解すべきかもしれない。

処女詩集たる『愛の詩集』以前に「抒情詩時代」があり、『抒情小曲集』がその時期に作られたものであったとする詩人の企ては、そもそもが『愛の詩集』編纂の時期まで遡ると見なされぬこともない。その「自序」に彼は記している。「情操的な多感な抒情詩の全てをこんどは此集に収めなかつた。おそらく相次いでそれらの小曲集をも出版して、自分の今まで来た道に、かなりな華やかな色白い少年の悩みを物語りたい」と。詳しい引用は避けるが、『愛の詩集』例言によれば、集中の作品は大正二年以降のものと述べられていたが、実際は大正四年から六年までの作品が収められていたのである。『愛の詩集』におけるこうした作為の意図については、更に問題を迂遠な道に引き込む恐れがあるので今は言うまいが、犀星の頭の中では『抒情小曲集』少年期の制作・感情を述べたもの、『愛の詩集』青年期というように、既に第一詩集編纂の時点で作品の整理・成立時期の偽造が企てられたとすべきかもしれない。彼の言葉に従えば、明治四十二年（二十一歳）から大正二年（二十五歳）位まで、大正二、三年（二十五、六歳）から『愛の詩集』「自序」執筆時の現在、大正六年末（二十九歳）までと分割された自身の歴史は、そのまま少年期、青年期と置き換えられていた。もっとも、年齢を見ればこの分け方はいかにも不都合なもの

であり、しかも当座で便宜的に吐かれたものであって、厳格にこれを考える必要はさらさらないが、こうした意識のあり方は〈自叙伝〉を書くこうとするときに、すぐさま流用されていたことは疑うべくもないことではあった。そのときに「抒情詩時代」Ⅱ「少年時代」は、多少とも実情に合うべく配慮されたすべきであろう。「少年時代」を取り扱う小説は、その中に二つの詩集、とくに『抒情小曲集』『自序』に述べる「抒情詩時代」を嵌め込むべく企画されたが、しかしながら二つの時代はうまく接合せず、乖離し、言葉・実体とすべきものが空廻りしているのである。

そもそもが二つの詩集のいかにも長い「自序」が物語るものは、詩を詩人の生涯と結びつけて理解して欲しいとする願望なのであった。そして詩人の生涯をそこに読み込むこのような行為が、いかにも「小説」的であることは言うを俟たないことでもあった。この時点で既に詩人の心は、詩を「うたう」こと（自立させる）よりも、それを生み出すべく苦悶する自身を「かたる」方向へと踏み出していたのである。〈自叙伝〉の試みは、二つの詩集における「自序」のすぐ隣にあったとすべきであろう。

それにしても、『抒情小曲集』を「抒情詩時代」Ⅱ少年時代の制作に関わるもの、少年の魂を扱ったとするのは、詩人の美しい嘘として素直にだまされても良い誘惑すら感じさせるが、

その「自序」に述べる「抒情詩時代」を散文で描こうとするときに、その具体的な時期の設定、少年時代を、矢張りそれにふさわしい年齢に選ばねばならず、そのことが作者の意図と実際の出来映えとを距てている原因となっていたことも事実であった。「抒情詩」と「少年」が乖離している。彼が書こうとする動機、「抒情詩時代」を証明しようという企てが、かえって逆に、その不在証明を得るといふ皮肉な仕儀になっていたのである。

〈自叙伝〉と呼ばれるべき作品が、その内部での時期の設定と、作者の実際の経歴との間に、奇妙な食い違いを見せているのは、それが小説・虚構であるからして当然のことではあるが、その原因が単に記憶違いによるものか、あるいは意図的な計算によるものかは、その作品を理解するうえで極めて重要な問題であろう。『抒情詩時代』における時期的な設定自体は、それほど作者の実際と異なっていた訳ではないが、それに「抒情詩時代」という内実を与えようとする動機において、いささか不純なものがあつたと言えようか。

3

『ある山の話』は、『抒情詩時代』に比べれば事情は簡単だ。『抒情詩時代』のように「そのころ」を連発して時間を並列させ、重層化させ、そのことによって豊富な感情・思いを抱いた

と作為を施すような構成をとることなく、始めから終わりに向かう直線的な時間の流れしかないからだ。山登りという一つの事実のみが素直に述べられているに過ぎないからだ。しかもそれは「五月十九日」という日付をもって、限定的に語られるからだ。

「私」は少年時代からいつも眺め暮らし、その山について幾つもの美しい口碑や伝説を優しい姉から聞いた医王山に、同性愛の美少年・Bとともに登ろうとするのであった。「私」にとって特別な山を、特別な相手とともに登ることは、「二人の仲にもつとしっかりと愛情を築きたいため」であり、特別な出来事なのであった。山の清浄さ、美しさに触れ、感嘆し、また山中の大池に深い神秘を感じる。危険な谷をのぼり、山頂では壮大な眺望を得て自由広闊さを思い、くたくたに疲れて日の暮れかかった山道をおりて来るのであった。

少年たちの冒険と美しい愛のあり方は、確かに彼らを一回り大きくする成長の糧となり、忘るまじき記念碑的な行為として永く記憶させるべきものであったに違いない。「五月十九日であつた」と唐突に述べる日にちの設定も、清爽な気配が感じられる季節、少年たちの純情さをも語りかけているようだ。初夏の新緑深い美しい自然のなか、彼らは山中の遅い春に出会うことにより、幼ない美しい感情を祝福され、この通過儀礼によって、一歩先、生の燃え盛るような暑い夏へと踏み込んでい

うとする。

このいかにも意味ありげな「五月十九日」という日付が語るものは、それがおそらくは事実であり、作者にとつても永く忘れられないものであつただろうということだ。とすれば、それが明治三十九年（一九〇六）、犀星が十八歳のとき、職場の上司・川越風骨ら十三名で、医王山への登山を行なつた五月二十日のことをいうに違ひはないだろう。日付が一日ズレているのは単なる記憶違いだろうと思われるが、作者は多人数で実施したはずのこの医王山行を、愛人と二人で行なつたこととして、虚構を施しているのである。しかもBという頭文字を明らかにした彼と。後に触れる『一冊のバイブル』にも、また『或る少女の死まで』においても、英字で記される友人の名が、正直にモデルとされる人物の名を語っているように、このBも誰かを特定していることは疑いないが、そうでなければ符号をもつて語らせる意味はないはずなのだ。医王山行をともにした一行のなかで、墨襟をBとして推測したいと思う。もつとも彼についてはまったく知るところがなく、犀星の若年時の知人中にBなる人物を他に求められず、しかも山登りをともにしたということのまったくの虚事とも思われず、同行にそれを探つたという苦慮の推定なのだが、実はどうでも良いことだ。犀星の美少年趣味、というよりも当時の一般的な性向については、『椰子』（昭11・6有光堂刊）等にも述べるところではあつたが、『性に

眼覚める頃』の表棹影に対する「私」の感情にも、それは多少とも見受けられるものであった。

十八歳、明治三十九年五月十九日（二十日）のことについて、この作品『ある山の話』は記していたが、犀星が〈自叙伝〉に記す日付は、その限りではかなり事実には正直だと判断して良さそうである。『抒情詩時代』が『抒情小曲集』から逆に読み込めば、かなり手の込んだ行為を施していたとしても（だがこれは、詩集の虚構であって、小説自体の時期設定はかなり単純なものだ。）、「十五ぐらいの時代」十七歳という時期と作品に述べるところは合致し、犀星は思いの外、時期をさほど歪めてはいないのであった。このことは次に述べる『一冊のバイブル』についても事情は同じいと考えられる。

『一冊のバイブル』は、作中に「大正六年（私注、一九一七）九月二十日」という年月日の記載を有していた。それは東京郊外、田端の百姓家の離れに住んでいた「私」に、父の危篤を知らせる電報（作中には死亡の通知とあるが、帰郷した「私」が父の死を見とったことを記している）、これは明らかな錯誤と言すべきであろう）が届いた日で、すぐさま金沢へ向かった。「私」は、その三日後に父の死を迎えたのであった。こうしたことはまったく事実と一致している。

父の遺産を手にした「私」は、処女詩集の出版準備に余念がないが、そうした「私」のもとに一通の手紙が届く。故郷へ向

かう途中の汽車の中で知り合った女性から来たもので、丁寧に返信をしたためたものの、そのうちに彼女からもう一通の手紙が届いたのである。発信地を見るとどうやら吉原であるらしい。「こんど恥かしながら勤めをすることになりました」と述べる彼女は、いま「この都会の深い泥濘の底へ墮ちて行」っている。その運命を呪うにつけ、「私」はそれによって慰められ、救われた、七年前にとある下宿の押入の隅に見出し、それ以来手元から離すことのなかった一冊のバイブルを、彼女に送ってやろうと決心するのであった。

この作品は七年前のことと、現在とを一つの串、一冊のバイブルで刺し貫くという構成を取っていたが、そこに描かれた七年前のこととは、確かに明治四十三年（一九一〇）のことであった。青雲の志を抱いて上京した犀星は、生活費を得るために東京地方裁判所で筆耕の仕事をしたり（これは作中に記すように、Fにすすめられたのではない）、詩や俳句の代作をしたりして、名をあげることの叶わぬ惨めさのうちに、下宿を転々としていたが、そんな頃に知り合ったのが同郷の文学志望者・藤沢清造であった。このFと記される親切な友のことや、一と夏、松虫を飼っては心慰め、餌をやる金銭の余裕もなく、むぎむぎと死なしてしまつた悲しさなども、決して忘れることのできないことなのであった。

犀星はこれら数年を間にはさんだ二つの時期について、かな

りの程度事実によく描いているようだ。しかし大きく実際と違うのは、明治四十三年以来、彼が聖書から離れることがなかったということだ。彼は、それを下宿の一室に見出したときに「不意のものを贈られたやうな」嬉しさと、「同時に運命を指摘されたやうな不安と、ある微かな恐怖」を感じて、「何か知らあるものに予言されるやうな、心をつき刺すもの」があつて、手離すことが出来なかつたと記しているが、こうした劇的なバイブルとの出会いこそが、そもそもの虚構であつたのである。

更に言えば、『愛の詩集』を出版すべく、いま神の祝福を受けている「愛」の詩人と、一方で淪落の淵へと滑り込んで行く可哀な女との対比も、まるっきりの創作だつたかもしれない。犀星が聖書を手に入れたのは明治四十五年（一九一〇）のこと、本郷の縁日で五銭で買い求め、他に読むべきものとしてなく、明け暮れこれを読み耽っていたらしいのだが、不遇時代の一筋の光明をそこに求め、今日の詩人としての成功を神からの賜とする作者の演出が、かかる作為を呼んでいたことは言うまでもないことだ。しかもそのことよつて「愛」の詩人・室生犀星のうたいあげる詩は、さらに光り輝くといった具合なのだ。

こうした虚構にもかかわらず、二つの時期の事実、作者の生活や心情のあり方は比較的忠実に描かれており、「大正六年九月二十日」という日付は、〈自叙伝〉の信憑性を裏付けるべく据えられていたのである。否、むしろ、こうした実際の日付や

年齢によつて刻印された時代を描くためにこそ、虚構は要請されたのであつて、虚構は事実には奉仕する召使いと言ふべきであつたのである。事實は動かせないと彼は考えたのである。日付は事実と虚構とのとりあえずの接点であり、何よりも能弁に「私」の人生を語る指標であつた。

ところが、以下に述べようとする三作、『幼年時代』『性に眼覚める頃』『或る少女の死まで』における時期設定、年齢、日付は、今まで述べて来た三作とは逆に、作者によつて再構成され、虚構を用いることによつて描かれた彼の人生が、嘘・偽りない事実であることを証明するためにこそ据えられているといつた具合なのだ。悪く言えば、でっちあげ捏造した人生を、事実めかすためにそれは用いられている。多少言葉を柔らげるならば、年齢や日付は、作者のその当時の、人生の眞実を描くために必要なものであつて、作品の背景として実人生のなかから都合良く拾われたものに過ぎないのである。つまりは、事実なぞ、主人・作品という虚構のてさき以上のものではないということだ。自らの人生を描くべき〈自叙伝〉というものの考え方が、素材にもたれかかることなく、ここで大きく変質し、逆転していることを見ることができる。

次節に移る前に少し付言しておきたい。『一冊のバイブル』は『幼年時代』の次に執筆・発表されたのであり、確かに前二作、『抒情詩時代』や『ある山の話』に比べて、その創作方法

が飛躍的に進歩しているが、その事実と虚構とに対する考え方において、『幼年時代』以下とは同列に論じられないということだ。しかも作品間に、ある連絡をもって人生を再構成・虚構化し、長編的な〈自叙伝〉を作っていくこうとする意志的な姿勢に乏しいのであった。よってこれを、大正八年前期の作品系列に入れたのである。

4

「私の十三の冬はもう暮れかかつてゐた」という一文に終わる『幼年時代』は、美しい小説だ。生母を失い、姉を失って孤然としてたがずむ「私」の子供らしい時期、「幼年時代」が終つたのは十三歳（満年齢では明治三十五年・一九〇二）の冬のことであつた、と作者は記している。

明治三十五年五月に、犀星は長町高等小学校を三年次で退学、以降は大人たちの間に立ち混って働かなければならなかつたので、この時、満で十三歳が、幼年時代の終わりであつたとする作品設定は、作者の実感に深く根ざすところであつたろう。その寒風の吹き抜けていくようなうそ寒い淋しくも悲しい心情を、犀星は冬という季節に仮託して述べている。しかし明治三十五年、数えて十四歳の春に薄の激変を迎える彼が、その前年、十三歳の冬の寒さを予感的に感じ取つていたとする方が、あるいは適切かもしれない。

作中には「ちやうど七つ位の子供であつた私ども」「九歳の冬、父が死んだ」（これは三月のこと、早春とすべきだが、北陸ではやはり冬であろう）「明治三十三年の夏、私は十一歳になつてゐた」（事実符合。犀星は八月生まれであるから、この年の夏、数えて十二歳、満で丁度十一歳を迎えたことなる）等、また「十三の冬」といった記述が見られることから、この作品の時間的な設定は、七歳位から十三歳の冬までと判断されるが、その上限の設定は七歳時に尋常小学校に入学したという事実、それが実人生における一つの節目であること、また、作中に学友たちとの交遊が描かれ、どうやらそれは一時期のものとするよりも、小学時代を通じたものとして描かれているらしいこと、から判断したものである。犀星は「自叙伝奥書——その連絡と梗概について——」（『中央公論』大8・12）という随筆で、「六歳のときよその家へやられ、十三歳でその家から、ある寺に養子に出された。そして私の処女作小説『幼年時代』（本誌八月号参照）が生まれた」と書いているが、と同時に「六歳まで」の章題も付され、それまでと、それ以降を区別していることから、（六歳から、という言い方はされていない）むしろ七歳から十三歳までという考え方は認められるものであろう。作品に描かれる実家への訪問も、養子に出されてから少し後のことといった感がある。

もっとも、先の随筆に述べたことは、まるで事実と反してい

することも言わねばならない。小島弥左衛門吉種と、そこに住み込んで主人の身の回りの世話をしていた女性・はるとの間に生まれた子・犀星が、養母・赤井ハツのもとに引き取られたのは生後一週間ほどのことで、隣家の優しい和尚さんとして描かれた雨宝院の住職・室生真乗の養嗣子になったのは、彼が八歳のとき、明治二十九年（一八九六）のことであった。作中には「私」が寺の養子になったのがいつのことかは明示されていないが、前後の文脈から推測すれば、十二、三歳の初夏であったと思われる、もとより特定することはできないのだが、「自叙伝奥書」に述べる十三歳と考えられなくもない。そしてそもそも「私」が養家に出されたのがいつかと言えば、作中に記される生父・母への馴れ親しみから逆に推測すると、なるほど、その言葉通り、六歳のとき他家に出されたこととはうなづけぬことではないのである。「幼年時代」以下の三連作の、補足的なものとして書かれた「自叙伝奥書」は、年代設定においては良き注釈書たり得ている。

しかしながら『幼年時代』を、作者の年譜と比較しながら読めば解るように、そこに描かれていたことはいかにも事実らしいが、実はまるで出鱈目なのであった。実際は生家とは殆んど没交渉で、母の顔すら覚えていないという犀星の描く心温まる母との交情は、切ない夢想の所産というべきであった。また、そこには馬方ハツという異名を持つ養母が加えた、彼に対する

残虐非道な仕打ちも描かれてはいない。『幼年時代』が描くのは、優しい母を失くし、そして血はつながらないが優しい姉に去られ、孤独にうち震え、傷ついている少年の純潔な魂の内部分風景だ。遠くあの日の悲しみを、そつと手のひらに乗せ、取り返しのかぬ幼な心をうるんだ眼で見つめている犀星のまなざしが、この作品を詩的な形に結晶させていたのである。そしてそれは、さまざまに虚構を施すことよって始めて、か細い網の目に掬い取られるようなものであったことは間違いない。とはいえ、一から十まで虚構であるはずもなく、学校生活のいたたまれぬ思いや、淡い恋情、悪戯や教師への反抗は、確かにこの時代に体験した事実裏打ちされているのであり、それらを作者は巧みに虚構のうちに取り込めていたのである。

だが、虚実ないまぜとは余りにも当り前のことなのであり、例えば『抒情詩時代』において養母の姿を描かなかったこと、『幼年時代』のそれとがいかにか違うのかは、書く必要がなかったことと、あえて書くまいとすることとの違いだと言えば良いだろう。幼年の傷、つきやすい薄い皮膜で覆われたようなナイーブな心情を描くために、彼は真つ先に養母にまつわる忌々しくも暗い記憶を排除せねばならなかった。犀星にとって幼年時代を描くことは、詩人の魂がどこに由来するかを探ることであり、酒好きで野蛮な無教養な女が振るう日常茶飯的な暴力に向かつて、絶えず反抗し、その気嫌をすばやく盗み読むような、

いじけた心情を正確に写し取ることはなかった。生母、そして彼女に代わる姉の不在に、「私」のはじめがあった。養父はそれを静かに見つめてくれたのである。

「私」はよく喧嘩をした。「私はどういふ時にも嘗つて泣かなかつたために、仲間から勇敢なものやうに思はれてゐたが、心ではいつも泣いてゐたのだ」。教師に憎まれ、いつも居残りを命じられる「私」は、彼に横顔を撲られ、「この全世界のうちで一番不幸者で、一番ひどい苦しみを負つてゐるものやうに」感じられている。こうした被害者意識、少年の受動的なあり方は、まるで幼心の美しさの証明であるかのように語られている。無知蒙昧な莫連女や世間に絶えずいたぶられ、所詮は台所を這いずり回つては苦悶する虫のような、惨めな生を描くのが目的ではなかった。犀星は実人生における都合の良い素材ばかりを選んで、否、それどころか、せめてはかくありたかつた人生と実人生の履歴との折り合いを付けるべく、時代をまるごと偽造しようとしているのである。

悲しくも懐しい幼年時代は、同時に、「私」がそのような運命を持たなければならなかつた憎むべき時代でもあり、復讐すべき対象でもあつた。

私は「大きくなつたら……」と深い決心をしてゐた。「もつと大きくなつたら……」と地べたを踏んだ。私の心はまるでぎぢぢちちな石ころが一杯つまつてゐたやうであつた。私

はこの日のことを母にも姉にも言はなかつた。唯心の底深く私が正しいか正しくないかといふことを決定する時期を待つてゐた。

「私が成人した後には私が受けたよりも数倍な大きい苦しみを彼らに与えてやらう。かれらの現在とはもつと上に位した総ての点に優越した勝利者になつて見かへしてやらうと考へてゐた。」という文章もある。憎み、かつ愛すという対立的な感情が、事実をそのまま書くといふことを彼に許さない。(自叙伝『幼年時代』は、自らのこれまでを語るといふ点において、きわめて意図的な創作方法を有していたのである。

「私の十三の冬はもう暮れかかつてゐた」という、作品末尾に記された一行は、既に虚構の年代暦が自律的に刻まれていたことを告げていたのである。

次作『性に眼覚める頃』については、多少述べたことがあるので簡単に語りた。

この作品は夭折した友人・表棹影との交遊のうちに、「私」が「文学」に眼覚め、「性」に眼覚めてゆく過程を描いたものであるが、作中に日付が記されているのはただ一か所、「私」が東京の雑誌『新声』に投稿して初めて採られたという詩を記して、それを「(明治三十七年七月処女作)」と明示した個所である。だが、そこに詩が載ることは「実力以外では殆んど不可能なことであつた」と記す雑誌『新声』に、犀星の詩が初めて

掲載されたのは明治四十年（一九〇七）七月のこと、しかもその詩は、作中に置かれた「いろ青き魚」のそれではなく、「さくら石斑魚に添えて」というものであった。犀星は事実を三年も早めているのである。

このことは詩への眼覚めが随分と早かったことを示す虚栄心に発していると判断されるが、それだけではない。詩を書く以前、彼は職場で、あるいは結社に入って俳句を作っていたが、それが広く公けに発表されたのが、現在確認されている限りでは明治三十七年（一九〇四）十月八日『北国新聞』においてのことであれば、俳句・詩を含めて文学に眼覚め、文学者として立った（と楽天的にも信じた）年次、明治三十七年を踏まえ、詩人としての出発をそこに求めた行為だったのである。七月という月までをいじくる必要はないが、犀星は二つの事実をもって、まるで別の出来事を扮飾・創作していた。ことさらに本当めかした日付を記して。

しかも実力があり、処女詩がそのまま中央の雑誌に掲載される豊かな天分を持っている「私」であれば、その詩は秀れた出来映えを示すべきなのであり、「さくら石斑魚に添えて」の詩は、そこに流用してはならず、『性に眼覚める頃』創作の時点、大正八年に、作品が語りかけるものにふさわしい詩として、あらたに創作されたのであった。「いろ青き魚」の詩は、孤独の悲しみ、遙かなものへの憧憬、そして諦めをうたって、十七歳

の主人公に「私」の、多感で繊細な心情を映し出す。

ところが、十七歳という設定自体も、これまた容易には信じ難いものなのだ。明治三十七年は犀星十六歳数え、同四十年が十九歳だから、どちらに合わせても実年齢は作中のそれと一致することはない。『性に眼覚める頃』は、春から冬へと時間推移し、これは一年以内のことであろうから、明治三十七年晩春から冬までのことを描いているとすれば、先に述べた三年のズレは、ここに動かし難い新たな別のズレを生じさせていたと言ふべきなのであった。しかも実際は二歳年下の表棹影がやはり同年齢の十七歳と設定され、その恋人・お玉もそうであったとすると、一層事情はこみ入って来る。何も事実に関われずに、作者の錯誤、無造作と扱えば良さそうであるが、実は案外犀星は細かい配慮をしているのである。

室生犀星と表棹影との交遊がいつ頃から始まったかは詳らかにし得ないが、作中に記すような明治四十年の『新声』の詩がきっかけではなく、少なくとも三十九年中には知り合っていたと推測される。その彼・表棹影と、尾山篤二郎らとはかつて「北辰詩社」を結成したのが、明治四十年七月頃らしいこと、とすればそれは先に述べた「さくら石斑魚に添えて」の詩が『新声』に発表された時期とほぼ一致し、このとき、犀星が十九歳、表が「十七歳」であったことは見過すべきことではあるまい。北辰詩社の結社によって親交は深まり、まさに盟友とも

言うべき結合を彼らが生み出したことは容易に想像されるのである。満足な学歴を持たない一介の植字工であった表樟影に、犀星が他の知友よりも特別な親しみを感じたことは言うまでもなく、とくに若くして死んでいった永遠の未成者について、その才能を惜しみ、一時代をともした友情を記したいとする心情が、あの頃、表が十七歳であったことに敏感に反応しているのである。しかも異性への手ほどきをし、ともに熱っぽく詩を語り合う友人が、「私」よりも年下であってはならないとすれば、彼の恋人・お玉をも含めて同年齢、十七歳という設定を企てたのは、いかにも賢明な発明であった。かくて幼なさを残す愛と苦悩とに揺れ動く「私」の性と文学との眼覚めを語るこの〈自叙伝〉は、三者に共通し、どの時代においてもそうであるような、青年男女の「成長」を典型的に示し得たのであった。

だが、まだ問題は残されている。この作品内の時間が、「私」が十七歳のとき、明治三十七年晩春から冬までのことであったとは先に述べたことではあるが、表樟影との交渉を一年以内のこととして語るやり方が、随分と事実を歪めているという点である。明治三十九年にはじまつたらしい「私」と表との交遊は、同四十二年四月、彼の死をもって終わりを告げた。この足かけ四年ほどの付き合いを一年間、しかもおよそ五月から十一月までとしたために、例えばその親密さが異様に見える、また病床に伏した友人を見舞うのに、北原白秋の明治四十二年三月刊行の

詩集『邪宗門』を持参するなど、不審な個所が生じてしまっているのである。しかしながら性に眼覚めて行く青年の心の揺らぎを描くために、自然的な時間と歩調を合わせて作品を構想する犀星の方法が、秀れた効果を發揮して、さほどの不自然さを感じさせない。巧みな手腕であった。

かくして見れば、『性に眼覚める頃』という作品が、贋金造りの要領でいかにも周到に配慮されつつ、成されていたことを知るのである。何という手の込んだ仕業であろうか。だがそれは遂一事実と作品とを照合するからそう思えるだけの話であり、作品を作り出す方法内部 論理に従って見れば、むしろ煩瑣な手続きを踏んだものでは毛頭なくて、いかにも理に叶った自然なやり方であることに気がつくのである。〈自叙伝〉を書くことにおいて、犀星は最早かつてのように事実には囚われることはなくなっている。彼は偽せの歴史をこしらえているのであり、逆に言えば、虚構のうちに自身の歴史を再構成している。つまり、作品に歴史を一致させようとしていたのである。書かれたことが真実なのだ。

そして作者のそうしたやり口・方法が突出する点として日付があった訳である。いかにも事実めかした日付、年齢をあえて書くところが曲者なのだ。その破れ目から、作品の動機・主題・方法を探りゆくことが可能になるのである。

『或る少女の死まで』についても、その作品の方法について論じた別稿を用意してあるので、簡単に語らざるを得ない。

この作品はその末尾に、表題に述べる一人の少女の死を悼んだ詩一篇を載せていたが、その少女・山元ふぢ子、ボンタンと愛称を与えられた彼女と別れて、ついにそのままになってしまったのは、「明治四十四年（私注、一九一〇）十月三日」「第一回の都落ち」のときであった、と作者は記している。ところが、矢張りこれも捏造された日付であったのである。

一体に売れない詩人・室生犀星が、東京に上ってはそこで食い詰め、故郷にもどるといことが何回か繰り返されたらしいが、その上京、帰郷の年次は明らかならざるところがある。初めての上京が明治四十三年（一九一〇）五月であることは、「泥雀の歌」（『新女苑』昭16・5—17・2）等に記されているところだが、「自叙伝奥書」には明治四十三年十月五日とあり、別に自ら違った日付をも用いているから始末に困る。第一回目の帰郷のことも、この調子でよく解らないのだが、断定的で記念的な書き方からして、案外この日付は信じて良いかもしれないと思わせるのである。よしや誤りであったとしても、それは記憶違いが原因であるに違いない。そうでなければこの日付が持つ強い記念碑的な性格が理解できないからだ。少なく

とも第一回目の東京での挫折、離京が明治四十四年十月三日のことだと認めることに、いささかのためらいも覚えるものではないのである。しかしそれが少女との別れの日であったとするのは、まったくの虚構なのであった。こうした以下に述べるような偽装工作からして、さらにこの日付まで変える理由は、おそらくどこにもないだろう。

山元ふぢ子、ボンタンについては、既に二つの随筆「小さきものの靈魂に」（『地上巡礼』大4・1）「ザボンの笑る木のもとに」（『詩歌』大5・5）が発表されており、それらによれば、彼女との交渉は大正三年（一九一四）一月頃から二月までの間のことであった。その離別は二月十四日、前橋に友人・萩原朔太郎を訪ねたことより生じたもので、とても明治四十四年十月どころの話ではなかったのである。

しかもボンタンと知り合うきっかけ、作中にある暴力事件のことが記され、そのことが晴れやらぬ嫌悪感を「私」に与え、逃げ出すようにして下宿を変え、そこで清純な魂を持つ少女に出会ったとするが、その事件というのが大正三年八月ごろのものだったのである。仲間のO（尾山篤二郎）やH（広川松五郎）とともに、酒場で土地のやくざまがいと起こした暴力沙汰は、少女と犀星との淡い交遊以後、半齢後の出来事だったのである。（『自叙伝』はこれら二つの事実の前後を入れ換えて、緊密に結びつけている。そしてそれが三年前、彼の初めての滞京

時のこととして。

犀星はボンタンによって得られた救いを、一層効果的ならしむるために、前後を入れ換え、因果関係で結んだのである。こゝと志成らずに放蕩を繰り返して、無頼の日々を送っては忌むべき事件を引き起こす羽目にもなる、「私」の荒らくれた心情と、ふぢ子との関わりの中に得られた救い、そしてそのことによつて取りもどす「私」のなかの美しい感情、創作意欲とを対比させ、魂を回復する物語としてこの〈自叙伝〉は作りあげられたのである。

こうした虚構のどれほど事実と食い違っているかは、火を見るよりも明らかなことであろう。犀星はまだまだ兇賊まがいのあくどい日々を送らなければならなかつたし、挫折を繰り返さなければならなかつた。しかしながら彼が初めて上京してから、詩人としての成功を収めるまでの長い年月は、魂の上昇運動と下降とを繰り返しながらも、全体的には美と愛とを信ずる詩人の魂の確立・回復する過程と見なされるものであり、そのことを端的に象徴する物語として、この〈自叙伝〉は読まねばならぬのであつた。しかもなお長い辛い日々が残っているとすれば、真の救済を得たボンタンとの美しくも清々しい記憶は、確かに初めての帰郷と挫折とに関わるべき、時代の記念碑として据えられなければならなかつた。そこからさしてくる明りを手にして、長く暗い日々をわたるために。

かくて、一応は大正八年の六つの〈自叙伝〉について触れた訳であるが、前期と後期との二種類の作品群が、いかに距たつていたかを明らかにしたつもりである。自らの歴史を語るといふ〈自叙伝〉にしても、所詮は作りもの、虚構であつて、事実を述べるものではないことは言うまでもないが、それをもとにした作り方が随分と違つているのである。事実に沿つて作品・虚構を構想してゆくやり方と、虚構が事実を否定し、それを作り変えてゆくやり方がある。偽物らしい本物、あるいは本物らしい本物と、本物らしい偽物がある。

犀星が腰を据えて小説、〈自叙伝〉を書くとしたのが、さて何時頃からだつたかは明らかではないが、『愛の詩集』と『抒情小曲集』とを出してしまふと、私にはもう詩はなくなつて了つた（『泥雀の歌』）とあるように、二つの詩集出版後だつたかもしれない。しかし二つの詩集の「自序」が述べるように、自身の歴史を語りたという散文への意欲は、詩集をまとめるという行為のうちに、既に芽ばえとして孕み込まれていたとして構わないのである。

以上論じて来た六つの〈自叙伝〉とは別に、「海の散文詩」と題された金石時代を描いた〈自叙伝〉的な試みもなされ、それが掲載された雑誌『感情』第30号（大8・7）「編輯記事」において、「私の自叙伝は四百枚に達した。この秋出版する」と、犀星は記してもいたのである。だが、このことは容易に信

じられないし、おそらく事実ではないだろう。しかし何らかの計画を持っていたことは疑いを得ないし、それはこれまでの人生を時期的に区分し、それを束ねてみれば一つの長編的な〈自叙伝〉が出来あがるといった、素材・事実にもたれかかった安易なものであったろうと推測されるのである。その時期、『抒情詩時代』『ある山の話』は脱稿していたであろう。加うるに「海の散文詩」、そして「大正七年作」として初収単行本において注を付された^{注6}「山間の少女——少年時代の章——」（『中外新論』大9・6）も、その〈自叙伝〉には入っていたかもしれない。しかし、長編的な〈自叙伝〉を構想することが可能なのは、素材を統一、組織化する明確な方法を持ったとき以外にはなく、『幼年時代』以降、初めて犀星はそれを成し得たのであった。

室生犀星の〈自叙伝〉は、まず自身のこれまでを描くという、いかにも素朴な素材重視の観点から発想されていたが、次第にそれを書く〈方法〉を見い出して来るのであった。そのとき、〈自叙伝〉は事実に関われぬ文学、一編の虚構として自立した。詩人の模索的な習作の段階は終わり、彼は大正八年八月、小説家として戦列に加わったのである。

注

1 室生朝子・本多浩・星野見一編『室生犀星文学年譜』昭57・

10 明治書院刊。その外、詳しく注記することはしないが、小論がこの書に多大な恩恵を受けて成立していることを言明しておきたい。

2 拙論「室生犀星『性に眼覚める頃』の方法」、『大正文学1』所収 昭62・3 大正文学会刊。

3 奥野健男「青き魚——室生犀星の詩的故郷——」（『季刊芸術』昭42・10）、日本文学研究資料叢書『近代詩』昭59・4 有精堂刊 所収。

4 拙論「室生犀星〈自叙伝〉の〈方法〉——『或る少女の死まで』を中心に——」未発表。

5 三浦仁「愛の詩集」——犀星詩の展開——、『日本の近代文学——作家と作品』所収 昭53・11 角川書店刊、日本文学研究資料叢書『近代詩』昭59・4 有精堂刊 所収。

6 結城信一〈犀星ノオト〉「犀星における小説の出発点」（『銅鑼』第3号 昭35・5）、奥野健男編『室生犀星評価の変遷——その文学と時代——』昭61・7 三弥井書店刊 所収。

本文は新潮社版『室生犀星全集』に従った。

それに収録されていないものは初出に従っている。